

世界マスターズで活躍の日本勢 4人が金メダル獲得

盛夏の8月。涼を求めて“水遊び”にひかれる季節だが、コロナ禍はまだ収まらず、マスターズの活動もいまひとつ。だが、フィンランドのタンペレ市で6月29日から7月10日まで2022世界マスターズ陸上競技選手権タンペレ大会が開催され、日本から男女26人がエントリーし、各国のマスターズ・アスリートと交流して、レースを楽しんだ。活躍した人たちに照準を当てた。

写真／赤堀弘晃さん、坂口正芳さん、福田博之さん、大日向晩子さん



M50・100mと200mで二冠の赤堀弘晃さん

100m、200mで二冠達成 赤堀弘晃さん(兵庫)が快挙

フィンランドの空は青かった。「天候はいいし、風もまずまず。さあ、いこうか」と気を引き締めて、スタートラインについた赤堀弘晃さん。今年の世界マスターズ陸上は4年ぶりの参加だった。

今年50歳になり「M50で頑張るぞ」の気持ちで臨んだ今大会。ただし大会に備えて張り切った矢先、体調不良に陥り「1か月間、練習できなかった」まま日本を出発した。

当地に到着して「ぶっつけ本番でやるしかないな。ただ、いい走りを心掛けて」と思いスタートラインへ。100mの予選は12秒35(+2.0)で1着。「まずまずか。思ったより脚が動く」と気分が楽になった。体調不良で練習できなかったことで力が温存できたのか、気力も充実してきた。

準決勝を11秒85(+1.0)で2位通過した後、決勝ではスタートもきれいに切れて、11秒49(+0.4)のトップ

でゴール。調子も上がってきて、100mから3日後の200mもやる気が出てきた。予選、準決勝は24秒台だったが、決勝は23秒79(-1.4)で優勝だ。「2種目とも勝ててよかった。遠い所まで来たかがありました」と、不調を乗り越えた表情はさすががしかった。

坂口正芳さん(山梨)が日本新V M60のやり投で54m39

男子やり投のレジェンドが魅せた。最後の6投目の試技。左脚の痛みをかばうような助走だったが「身体が動いてくれた」と、やりを思い切って振り切ると、フィンランドの青空にきれいな弧を描き、54m39の地点へ。

左脚の痛みで全力助走ができず、万全な状態でなかったが、M60クラスの日本記録である53m10を6年ぶりに更新した。左脚の靭帯を痛めて、大会1カ月前まではジョギングさえできなかった。今回の好記録は「この冬の間、筋力トレーニングに励んだことがよかった」と「肩の力が戻ってきた」からだ。

今大会は最後の一投で54m台が出たが、1投目の45m50から49m70に上げ、3投目のファウルの後、4投目に51m87でトップに立ち、5投目には52m14とさらに記録を伸ばした。「脚の痛み止めの薬が効いてよかった。試合当日、朝、昼、試合前と3回飲みました。飲みすぎだったのかな」と笑いながら一。

7月8日に行われたやり投は天候にも恵まれた。「風の吹く方向もよかつ

た。前日までの2日間は雨が降ったりで気温も低かった。試合の日に晴れて助かりました」と感謝の念。坂口さんにとっては今回が3回目の世界大会。2016年にオーストラリア・パースでの第22回大会に初参加したときは55歳でM55クラスに55m31で優勝し、初陣を飾った。

2回目の18年のスペイン・マラガでは「肩をこわしてダメでした」と話す。その、マラガでの悔しさを今大会で晴らしたのだ。

坂口さんは50代からマスターズ陸上を本格的にやりはじめたのだが、過去をたどると、国内の一線級で活躍していたことが分かった。現在は山梨県に住む坂口さんだが、出身は四国の愛媛県。高校時代のベストは58m90で、インターハイでは予選落ちだったが、中京大では1983年のインカレで76m00を投げ準優勝している。ベストの78m46は1983年度の国内ランク5位の実力者なのだ。現在、61歳。山梨日日新聞社に勤め、今も非常勤で週何回か出社している。55歳のときに55m31のM55クラスの日本記録をマークした坂口さん。「体調を整え、62m47のM60・世界記録に挑戦したい」と



M60・やり投で優勝した坂口正芳さん

燃えている。いかにもレジェンドらしい言葉だった。

M40・110mHのNo. 1は 福田博之さん(兵庫)

M40クラスの110mHに出場した福田博之さん(兵庫)は強かった。予選を15秒41(−1.2)でトップ通過。決勝も1台目のハードルからトップに立つと、勢いよくスイスイと10台のハードルを越え、14秒50(+0.3)でダントツの1位となった。

「集中できてよかった。タイムには満足ではありませんが…。でも、ここまで(フィンランド)来たかいがありました」と笑顔がこぼれた。

野外での世界マスターズ陸上では、15年の第21回大会がフランスのリヨンであったときに36歳で出場。M35・110mHで14秒05の日本新で優勝した。この後、18年にスペインのマラガで行われた第23回世界大会では39歳と、M35クラスでは不利な年齢だったが、14秒41で2位と健闘した。そこから後はコロナウイルスの影響で、活動する機会に恵まれず、今回久しぶりの参加となった。

福田さんは世界マスターズ室内大会にも14年にハンガリーのブダペストまで足を延ばしている。

現在43歳の福田さんは筑波大の出身。兵庫県立の高校教諭で神戸高で数学を教え、陸上部の顧問を務めている。若い頃から取り組んできた110mHにはマスターズの年齢になってからも情熱を持ち続けている。そんななか、6月9日から4日間、大阪で熱戦を繰り広げた第106回日本選手権のオープン・マスターズの部の100mに出場できることになった。



M40・110mHで優勝した福田博之さん

「ハードル以外はほとんど出場したことがなく、100mはここ3年間で1度走ったか。でも日本選手権の舞台で走るのなら、しっかり走りたい」と張り切ったのはいいが、直前にぎっくり腰となって涙をのんだ。

ぎっくり腰で1週間は絶対安静の状態だったが、フィンランドの世界大会では、走れるまでに回復した。「助かりました。風も0.3mの追い風だったし、すべてがよかった。今後の目標はM45クラスに上がったとき、14秒38の世界記録に挑戦します」ときっぱり。

目標に向かって挑み続ける強い気持ちを持つ福田さん。今後に期待大だ。

W70・三段跳の大日向暁子さん(長野) 表彰式の「君が代」に感動

女子三段跳の女王は世界大会でも健在だった。72歳になった大日向暁子さんはW70クラスの三段跳に挑み1位に。大会当日の7月9日は「さわやかないい天気。涼しいし跳びやすい状態だわ」と感じていたが、跳躍は8m59(−2.0)と満足のいく記録ではなかった。

「物足りない跳躍に終わってしまっ。歳を感じさせる記録で…」と残念そう。「もう少し(記録を)伸ばしたかったのに」と自身の持つW70の日本記録(8m98)に及ばなかったことを悔やんだ。

大日向さんの過去の実績からすれば、そうかもしれない。40歳からマスターズ陸上で活躍してきた。44歳で愛知県国体に出て12m14のW40クラス日本記録をつくったのをきっかけに、W45〜70まで立て続けに日本記録を樹立してきた。

このうちW50の11m66をはじめ、55の10m97、60の11m04、65の9m81、70の8m98は世界記録でもある。これほどの実力者ゆえ、今大会の記録には納得がいかなかったのだろう。

ただ記録とは別に1位の表彰には感動したそう。「表彰台の上で聞いた君が代はまさに重厚。熱い思いがこみ



W70・三段跳で優勝した大日向暁子さんとそのご家族

世界マスターズ優勝・入賞者

クラス	種目	順位	タイム	風	選手名／出身地
〔男子〕					
M40	110mH	1位	14秒50	+0.3	福田 博之(兵庫)
M50	100m	1位	11秒49	+0.4	赤堀 弘晃(兵庫)
	200m	1位	23秒79	−1.4	赤堀 弘晃(兵庫)
M60	やり投	1位	54m39◎		坂口 正芳(山梨)
〔女子〕					
W70	三段跳	1位	8m59	−2.0	大日向暁子(長野)

※ ◎は日本新

あげてきました」と話す。この君が代をイタリアに住む娘さんが「表彰台のお母さんのために」と歌ってくれたのは「感激の一言」と大日向さん。

陸上以外に楽しみにしていたことがもう一つ。大会の後、ヘルシンキ国内を一家で旅行したことだ。今回は同行したご主人はじめ、娘さんの子どもで大日向さんにとっての孫、中学生のガブリエレくんらも応援に駆け付けてくれたのだ。「とっても楽しかった!」と喜びを表わにした。

秋山俊二さん(香川)らも入賞へ

日本勢でトップ8に入ったアスリートは9名。トップに立った人たちのほかに、M60の秋山俊二さん(香川)は、400mで57秒39の3位に入り、57秒80の日本記録も更新。200mも26秒39(−0.3)で8位と2種目に入賞を果たした。

M65の佐藤隆一さん(東京)は800mと300mHに入賞し、ハードルでM40の日本記録を持つ吉岡康典さん(愛知)が今大会ではM45・110mHに挑み、15秒30(−0.4)で2位に。

女子では今泉愛子さん(埼玉)がW55の800m、1500m、5000mの3種目に入賞を決め、W40・80mHでは高畑志野さん(長野)が12秒23(+1.2)で4位に入った。